

春セミ 5thC テーブル (ジャッジ：古瀬、牧野)

鈴木 (東洋 3)
北風 (法市 2)
小澤 (明治 3)
亀島 (早稲田 2)
土屋 (学習院 3)
青柳 (学習院 3)

Narrowing

北風のアローイングによって、反論も質問もなく進められた。

Voting

オピニオンプレゼンター (以下、OP) 立候補者が鈴木のみであったため、鈴木を OP に据えて以下議論が進行していく。

Question for procedure

小澤と北風の質問を経て、納税や勤労などによる社会への貢献度を基にした鈴木のコンプリゾンアイデアが明らかになる。

Problem area

プロブレムエリアでは小澤、北風らが質問するも特筆すべき点はなかった。

Harm area

ハームエリアも同様に亀島、北風、小澤、土屋、青柳らを中心に質問を行うもこれといったゴチャリは生まれなかった。

Cause area

上記 2 エリアと同様、特筆すべき論点はなかったものの、青柳による「脳死患者は機械無しでは生きることが出来ない」という定義の追加が行われた。

NFC

北風のアローイングのみ検証。

北風のアローイングは「*iPS* 細胞を使った治療によって、全ての *TG* を将来的に救うことが出来るため、*Touch* すべきでない。」というものであった。土屋、亀島、鈴木、青柳らの質問を通じ、ロジックの理解が進められ、北風が反論を出した理由が *iPS* 細胞による治療が *DA* を生まない点にあることも判明した。

しかし、ここで亀島が「*iPS* 細胞による治療の実現までは *ADTG* を救うことが出来ない」という意見を提示し、北風がその意見を認め、Goal を「立論を暫定的に認めるものの、*iPS* 細胞の治療が実現したら、*Mandate* を無くす」という提案に変えた。しかし、鈴木によってこの提案が却下され、北風が「*iPS* 細胞を使った治療による回復の可能性を絶たれた脳死患者」を DA として出すことで落ち着いた。

(After NFC)

青柳が「今回の *TG* は死んだら、コンパリゾンアイデアにもある貢献が出来ない」という意見を提示、北風らによって理解が進められ、最終的に鈴木が臓器移植の拒絶反応によって死んだ患者を *TG* として扱わない、とした。

Direction

特になし。

Mandate

青柳、北風らを中心に質問が行われたものの特筆すべき点はない。

Solution

Practicability

- ① 亀島による「*Give and Take* における *Take* が脳死患者には無いため、*Give* を行わない。よって *Practicability* がない」というアイデア
- ② 小澤による「脳死患者にとって、臓器移植は殺人であり、憲法違反に繋がるため、*Practicability* がない」というアイデア
- ③ 北風による「*WHO* が臓器移植に反対しており、この *Mandate* を採用することで *WHO* からの支援がなくなるため、*Practicability* がない」というアイデア

- ① 青柳による源頼朝の御恩と奉公を用いたカンファメーションにより、*Give and Take* に関するアイデアだということが浸透した。その後、鈴木、北風らを中心にアイデア理解が進められ、北風のカンファメーションにより「*Mandate* は脳死患者の意志を蔑ろにしたものであり、日本政府は平等な関係を作らねばならないため *Practicability* がない」という本来のアイデアとズレがある形で浸透した。その後、鈴木が「*S.Q* にも不平等な関係が存在する」との意見を提示、加えて北風も「意志が蔑ろにされることは *S.Q* でもある」と米軍基地を引き合いに意見を提示するも、共に死に関わらない、という理由から、亀島は 2 つの意見を受け入れなかった。結局、鈴木がタスクを用いて、流そうと試み、北風の協力もあり浸透したことで、亀島は DA にアイデアを出すこととなった。

- ② 鈴木、青柳らを中心にアイデアの理解が進められ、OP と小澤の死に対する定義が異な

ることが判明した。そこで、北風が「コンパリゾンのあとに憲法違反かどうか決めるエリアを作ろう」と提案するも、鈴木や青柳らの質問により、通常のコンパリゾンを終えた時、us は日本政府から裁判所（おそらく最高裁）へと変わる、珍しい提案であることが判明。その珍しさもあってか、小澤は DA でこのアイデアを出す、ということでアイデアを取り下げる。しかし、青柳の「憲法における生命権と幸福権に関して、北風の提案したエリア内で話したい」という意見の結果、Voting によって、新たなエリアの設置の是非を問うこととなり、設置することに決まった。

- ③ 鈴木、青柳らの質問を通じ、台湾の例を基に WHO による情報提供をはじめとする支援が重要であり、支援がなければ日本国民が被害を受ける、というアイデアだと判明。その後、特にアイデアを詰める間もなく、北風が DA で出すということでアイデアを取り下げた。

Workability

青柳のアイデアのみ検証。

青柳の「Mandate によって、医者の仕事量が増え、ミスジャッジが増えるため、Workability がない」というアイデアが検証された。

鈴木が「仕事量が増えるにつれ、慣れる。よって、ミスジャッジは減る」という意見を提示したものの、うまく浸透せず、その後、北風を中心とする一連の介入によって、“医者”がドナーのコーディネーターを指すものと判明。その結果、ドナーのコーディネーターの仕事量の増減はミスジャッジに関係しない、ということでアイデアを青柳が取り下げた。青柳はこのアイデアを基に DA に立候補する、とした。

DA Voting

小澤、青柳、北風が DA プレゼンターに立候補した。小澤は脳死患者の家族、青柳は医者、北風は脳死患者を TG とした。Voting の結果、北風が DA プレゼンターに選ばれることとなった。

DA area

特になし。

Comparison

① 鈴木による AD>DA
② 北風による DA=AD
③ 鈴木による AD>DA
④ 亀島による DA>AD

- ① 「*勤労の観点から貢献度を図ったとき、AD>DA となる*」という鈴木のアイデアの検証が主に北風によって進められる。その過程で、DA も納税の観点において一定の貢献はみられる、という意見こそあったものの、勤労の観点においてはAD>DA という点は誰も否定できないまま、立論されることとなった。
- ② 「*iPS 細胞の治療により AD も DA も回復する可能性がある。よって貢献度において AD=DA となる*」という北風のアイデアは、AD=DA という普段あまり見ることのないロジックであるためか、アイデアの検証には時間を割くことなく、結論やコンパリゾンそのものへの質問が相次いだ。その結果、アイデアとしては立論される形となった。
- ③ 「*ADは生きている状態から死ぬのに対して、DAは脳死という仮死状態から死ぬため、ADを救う方が命をより救えるから Make situation better である。*」という鈴木のアイデアは特に反論も深掘りもないまま、立論された。
- ④ 「*ADは自然死であるのに対して、DAは殺人であるため、DAの方がADより深刻である*」という亀島のアイデアは検証途中のまま、時間を迎え、**可決**という結論で3時間10分にわたる議論が終わった。

<<最後に>>

皆さん春セミお疲れ様でした。

まず純粋に春セミを出て、最後のテーブルまでやり切った、というだけでも十分立派だと思います。そこは誇りを持ってください。

3年生、最後の春セミはどうでしたか。悔いがありますか？やり切れましたか？もし後悔が少しでもあるのなら、アッセンで何か目標を立てて、今か出来ることを一つずつでもいいからこなしていきましょう。今の君たちに大事なものは、ランクのような結果そのもの、ではなく、何かしら達成したい事に対して、どうやったら出来るか考え、行動に移すことです。先ほど、アッセンと言いましたが、それはアッセンに限らずエデュケでもセクション運営でもいいです。まだまだ先は長いので頑張ってください。

2年生、初めて経験した本気のディスカッションは楽しかったですか？この春セミ、アッセン期のディスカッションはディスカッションの良い面でもあり、悪い面でもあります。でも、今見える景色だけで、判断するのは少し早とちりかもしれません。ディスカッションは上手くなればなるほど、見える景色はどんどん広がります。(僕自身もそこまで上手くなかったけど、初めよりかは上達して最終的には楽しく感じることはできた！)なので、もう少しだけ続けてみてください。

では、最後に改めて春セミ本当にお疲れ様でした！

雰囲気良く、楽しいテーブルでした＼(^o^)/

文責：牧野貴大（明治4）

《選定順位・理由》

文責：古瀬桃子（青学4）

1 位：鈴木（東洋3） オピニオンプレゼンターとして AD を立証した点、またコンパリゾンエリアにおいて AD>DA ロジックを2つ立証させ、take plan へと結論付けた点を評価し、1 位に選 出しました。オピメとして、他人のアイデアなどに対し丁寧かつ和やかに傾聴する姿 勢や、積極的に Q や C を重ねる点は良かったのですが、そこから S に繋げるなどの推 進力において少し欠けているように見られました。今回はコンパリゾンで出したアイ デアに対する Q やダウトがほぼなかったことから、立証へと導き出せましたが、今後 はアッセンに向けてコンパリゾンに対する理解やプレパ、S を通す等の推 進力の面における向上を心がけていければと思います。

2 位：北風（法市2） コンスタントに議論に介入し、相手や周りのアイデアを積極的に理解しようという姿 勢、DA を立証した点、そしてコンパリゾンエリアにおいて DA=AD ロジックを1つ 立証させた点を評価しました。1 位との点差はほぼなし。今回のテーブルにおいて最 も他人の意見やアイデアに対し、傾聴力かつ適宜丁寧なカンファメーションをもって テーブルに理解を浸透させていたように感じました。今後はコンパリゾンに対する理 解を深め、相手のアイデアに対する意見の深堀りやリフュート等の手数を増やせるよ うプレパを重ね、さらに上のテーブルを目指していってほしいと思います。

3 位：小澤（明治3） Praca エリアにて提示したアーギュメントから DA まで一貫したアイデアを提示した 点を考慮し、3 位に選出しました。他人のアイデア等に対し丁寧に傾聴する姿勢は好 印象でしたが、介入が限定的だったのがもったいなかったです。今後はアッセンに向 けて、他人の話にも介入し議論を深掘っていけるようトリートの練習や、アーギュメ ントを出す際も、相手の S に乗るだけでなく自ら T/P 引くなどして議論を進めていけ るよう心がけていくといいと思います。

3 位：青柳（学習院3） 介入は限定的でしたが、数少ない発言の中で適宜ダウトや議論推進に貢献する Suggestion を通していた点を考慮して、同率 3 位に選出しました。介入量が少ないた め、コンスタントな介入を心がけることが今後の課題ですが、一回の発言の質は良い ので、自分の意見の提示の仕方や介入の方法を工夫・改善していきなが

ら、もっと自信をもって発言していけたら良いと思います。

5 位：亀島（早稲田2） Praca エリアにおいてアーギュメントを提示した点を考慮し、5 位に選出しました。自身のアーギュメントにおける主張に対するテーブルの理解浸透率が低く、時間がかかっていたので、今後アーギュメントを提示する際は、一貫したアイデアの提示と相手に伝わりやすいエクスプラを心がけると、よりテーブルにおける理解が深まるのではないかと思います。

6 位：土屋（学習院3） 介入がほとんどなかったため、6 位に選出しました。介入していないことで、テーブルをより客観的に第三者目線から見る事が出来るとおもうので、テーブルに足りていない情報や矛盾点などに気づき、介入をすることで、議論をより深掘ったり進行できるきっかけ作りができるよう意識してみてください。

さいごに

みなさん春セミお疲れさまでした！ここからアッセンにむけて、コンパリの理解を深めたり、プレパにおいても毎回同じようにテーブルを組むだけでなく、アーギュメントのトリートやコンパリゾンに特化したテーブルを組んでみたりと色々工夫してみ、次はもっと上のテーブルに行けるように、できることから少しずつ頑張ってください！ほんとにお疲れさまでした。